

直観を信じて

第13期 川村 澄明

じゃあこれから、卒業する同期に、一言ずつメッセージを残していきたいと思います...なんてこと、絶対やだ、無理、ない。この2年間、小野ゼミで一緒に過ごってきて、今更改まって何か言うことなんてできないくらい、同期との関係は濃いものだった。だから、ここでは別れの言葉なんか言いません。

そもそも、私が卒業エッセイを書くかどうか、怪しいものでした。いや、別に第13期生が卒業エッセイを書くのは普通じゃない？と思われた方も多いかと思います。ですが、飛び級して大学院に進学した私は、すでに大学を退学してしまっており、厳密に言うと卒業はしないのです。私がこれを書くことを決めたのは、会誌編集長からの、「じゃあ書きましょー！(笑)」という軽い一言です。そんなこんなで、来年も変わらずにゼミに参加できるんだよなと思いつつ、つらつらと書き始めたエッセイになるので、あまり卒業感はないかもしれません...。こんな始まりですが、最後までお付き合いいただけたら幸いです。

あまり自慢になるようなことを話すのが得意ではないのでさらっと流しましたが、実は我々が慶應義塾大学商学部には、飛び級制度なるものが存在するのです。その条件は、学部1・2年生の時の成績が、上位5%以内に入ること。この条件を満たせば、学部3年生にして、大学院入試の受験資格をいただけるのです。試験の時期が秋口だったために、三田論も佳境だった当時は、試験対策のために様々な人にご迷惑をおかけしましたが、なんとか、皆様のご助力をいただいて、無事に合格した次第です。小野先生を始め、勉強を指導して下さった大学院生の皆様、そして先輩・同期、お世話になった方々に、改めて感謝いたします。

ただ、先ほど述べたように、飛び級をすると、大学は退学になるので、学士号はもらえません。それに、このまま大学院を修了できなければ、私の最終学歴は高卒です。それではなぜ、私は飛び級をしたのでしょうか。一言で言えば、面白そうだったからです。マーケティングという学問が、どこまで続くのか見るのが面白そう、当時の大学院生さんたちが、なぜあそこまで深いフィードバックをすることができるのか、その理由を探るのが面白そう、そんなことを考えていたら、いつの間にか進学手続きをしていました。

私は飛び級をして、やはり大変なこともたくさん経験しました。ですが、リスクもある中で、直観的に面白そう！と思ったことに夢中で飛びついてみる、そんな選択の仕方も悪くないんだなと、今は思っています。個人的には、軽い一言で決まったこのエッセイの執筆だってそうです。だから、最後に同期にはお願いです。これから社会に出て、合理的に選択できることばかりじゃないかと思います。小野ゼミでは確かに鍛えられたけど、それが通用する場面ばかりでもないと思います。そんな時、自分の直観に従って、リスクを恐れずに行動してみてください。先に社会に出る身なので、実験台になってもらいます(笑)。そうして、うまくいったかどうか、小野ゼミに報告しに来てください。いつでも、待っていますので。